

やまと 民俗への招待

1月28日、奈良市の都跡公民館で「薬師寺花会式―幸せの花造り―」と題する催し物があつた。薬師寺執事の松久保伽秀師が、法会の意味を話されたあと、花会式の堂内荘厳で最も大切な10種の造花(梅・山吹・椿・牡丹・藤・菊・桃・桜・百合・杜若)をつくる奈良市内の橋本・増田両家の3人の女性が、花造りの経緯やその実際を、60人ほどの参加者の前で初めて披露した。菩提山町の橋本眞知子さんは、父はサラリーマンになったが、

嫁にきた母が仏に供える花造りはやめられないう。その家で、子供の頃から自然に花をつくるようになり、両親と夫婦、さらに息子夫婦も一緒にあって、1月から3月の短期間に集中して、6種類1000本ほどの花をつくっているという。

薬師寺にほど近い西ノ京町の増田茂世さんは、夫が単身赴任する暮らしのなか、義父から、実家の協力も得て



(右から)松久保伽秀師、橋本眞知子さん、増田夏海さん、増田茂世さん、大谷館長と私 ―奈良市の都跡公民館で、筆者提供

ら花造りを受け継ぎ、農作業などもしながら、実家の協力も得て0本の花をつくる。会場では、型抜きした紙の花びらを手のひらに載せて、小さな棒を用いて花弁に丸味をつける「イタメル」作業の実演もしていた。桜と梅は300本ずつ。藁の束を天井から吊り下げて、完成した花をここに挿す。冬の時期、家の中に花が咲いていくのが楽しいという。花で座敷が埋まり、お寺の人が取りに来るとまるでお嫁に出すような気持ちにな

丹精込めた幸せの花

り、法会の間は、毎日のように見に出かけるという。この春大学を卒業した夏海さんは市内に就職をし、花造りを受け継ぐ決意を語った。花会式(3月25、31日)の始まる直前に、催しを企画した大谷華代子公民館長らと増田家を訪れた。無数の花で座敷は満開。丹精を込めた10種の花々は、十二瓶に分けて薬師三尊に供えられ、満行後、多くの人々に届けられることだろう。

(奈良民俗文化研究所代表・鹿谷勉)

―隔週掲載